

年間約14tの山うどを出荷している、農事組合法人・富根ファーム。平成19年の2月に設立し、現在役員2名・社員4名で、山うど4.1ha・水稻24ha・飼料用米3.5ha・大豆8ha・ねぎ20aを栽培しています。今回は富根ファームの池端竜さんに、山うどの栽培法や今後への展望等について伺いました。

「法人設立当時は人数も少なかったため、多品目の栽培管理や経営などで不安な面もありましたが、JAや地域農家など周りの方々に支えられ



ながら、順調に規模を拡大してきました。特産品の山うどに關しても、栽培者の高齢化などで年々作付が減少していますが、富根ファームでは平成26年度も50a増反し、これからの産地を守るために力を尽くしていきます。」

栽培へのこだわり

秋に山うどの根株を圃場から掘り取りする際、数年前までは地上の葉や茎を刈り取って寄せて置き、後で処理するという作業を行っていました。

た。この作業は非常に労力を要し、栽培者の悩みの種となっていました。JA農業機械課からの勧めで、トラクターの後部にフレールモアを取り付けることで、葉や茎を粉碎処理することができ、作業の大幅な効率化が図られました。

「作業の効率化によって、より作付面積を広げることができました。粉砕された葉や茎は掘り取り後にすき込みで、堆肥として活用しています。また、毎年山うどと大豆の圃場を回転させ、連作障害を防ぐとともに土壌の活性化を行っています。」

栽培の注意点

山うどは、圃場から根株を掘り取りしてハウス内へ敷き詰め、ジベレリン処理や覆土等を行い、約1ヶ月の管理後に収穫します。

「山うどの需要期は1月なので、それに合わせて収穫から逆算した栽培管理を心掛けています。また、収穫量に応じた温度管理によって、収穫場へ山うどを安定供給しています。」

今後の目標

栽培者の高齢化や後継者不足等で、全国的に山うどの栽培面積は減少しており、産地の維持が大きな課題となっています。

「特産品である山うどの産地を守るために、これからも人を増やして面積を拡大していく予定です。また、知名度を向上させ、色々な食べ方を知ってもらおうPR運動を、今後も山うど部会や青年部を通じて行っていきます。」と意気込みを話してくれました。



(上段左から)
池端 伸吾さん 池端 健一さん
(下段左から)
山谷 淳一さん 池端 竜さん

